

ノリ養殖経過

坂口研一

目的

三重県の黒ノリ養殖業の安定化を図るために、生産者に対して養殖環境についての情報提供や病害等の対策を指導するなど、きめ細かな対応が要求されている。そこでノリ漁場栄養塩調査、およびプランクトン調査を行いその情報を発信することにより生産者に対して現在の漁場の状態や今後の対応策についての情報を提供した。

方法

9月から3月までのノリ漁期中にノリ漁場栄養塩調査とプランクトン調査を実施した。栄養塩調査は伊勢湾のノリ漁場のうち、主漁場となる18測点の栄養塩とプランクトン発生状況を毎週水曜日に調査し、同日中に調査結果をFAXにより県内の関連漁協に送付した。分析項目は水温、塩分、溶存態無機窒素量、リン酸態リン量、プランクトン数である。

結果

1. 今漁期の気象の特徴

津地方気象台の観測値によると、気温は10月はかなり高め、11月、12月は高め、1月、2月はかなり高め、3月は高めで推移し、降水量は10月、11月は平年並、12月はかなり多めで推移した。1月、2月は平年並、3月はかなり少なめで推移した。日照時間は10月は多め、11月、12月は少なめ、1月は平年並、2月多め、3月はかなり多めで推移した。

2. 今漁期の海況の特徴

白子地先の水温は10月はかなり高めで推移し、11月も高めの傾向が続いた。12月に入ると再びかなり高めの水温となり、3月中旬まで継続した(図1)。

比重は10月から12月にかけては高めで推移し、1月以降は平年並みで推移した。出水等による比重低下がほとんどなく、非常に安定した状態で推移した(図2)。

桑名地区を除いた栄養塩量については、溶存態無機窒素(DIN)は10月下旬から11月中旬、1月下旬から2月下旬にかけて少なくなった(図3)。

プランクトンは11月初旬から中旬にかけて種々のプランクトンが複合的に発生したが、その後終息した。しかし1月はタラシオシラ sp. やスケルトネマ コスタタムによる赤潮が発生した。2月には優占種がニッチア プ

ンゲンスに代わり2月下旬まで湾内に広く存在した。

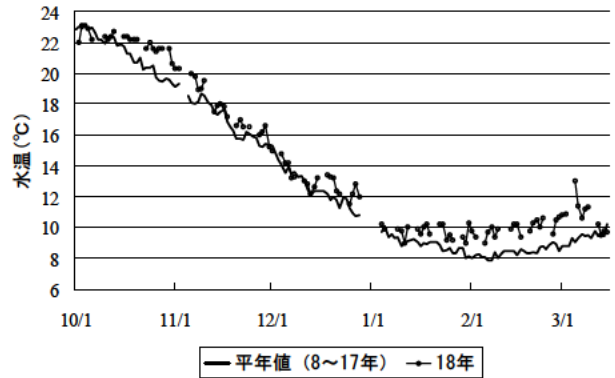


図1. 平成18年ノリ漁期の白子地先の海水温の推移

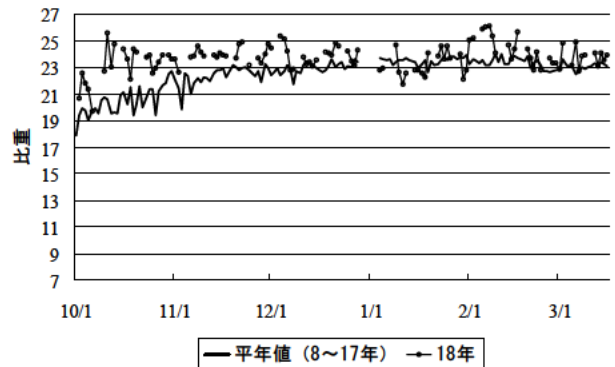


図2. 平成18年ノリ漁期の白子地先の海水比重の推移

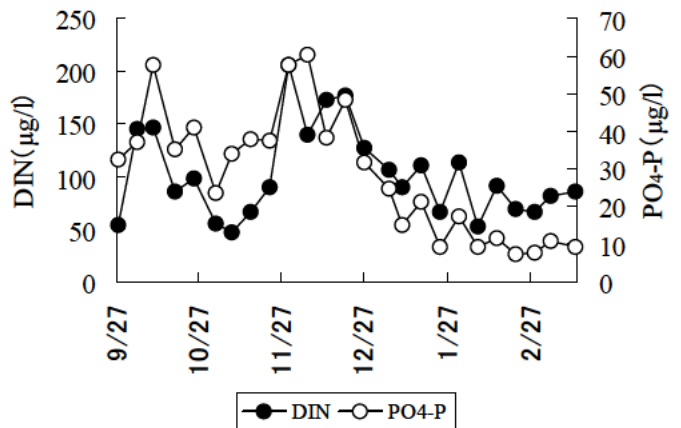


図3. 栄養塩量の推移 (桑名地区を除く)

3. ノリ養殖経過

今漁期の陸上採苗は順調に行われた。育苗中には栄養塩不足やアオノリ駆除に苦労したが、順調に育苗を終え

ることができた。年内生産は12月に降水量が多く、プランクトンの発生がほとんどなかったため、栄養塩類が豊富な状況が続き色の良い状況が続いた。また、病害の発生もみられなかったことから、順調な生産が行われた。しかし、1月にはいると伊勢湾各地でプランクトンの発生が見られ、色落ちになる漁場が目立った。2月になると色落ちはさらに深刻になり、生産を見合わせる漁場が多くなった。さらに、色落ちが回復傾向になると赤ぐされ病が蔓延する漁場が見られ、冷凍網生産期は品質が良くない製品が多くなった。今漁期は近年の高水温傾向から、育苗の開始時期を遅らせる傾向が見られた。このことにより、10月の水温低下が非常に鈍かったにもかかわらず、年内生産を無事終えることができた。しかし、冷凍網生産期の海況が長期間悪かったことから今漁期の生産量は昨年度を上回ったものの非常に低調なものとなった。

4. 共販結果

年内の三重県の出荷枚数を昨漁期と比較すると、平成17年漁期は2千640万枚であったが、平成18年漁期は3千898万枚と約47%増加した。三重県では昨年、年内生産が大不調であったが、今年は大きく生産量を伸ばした。

漁期を通じた生産量では冷凍網期の不調が影響したことから平成17年漁期は約2億7,592万枚であったが、平成18年漁期は約3億2,738万枚と約19%の増加にとどまった。

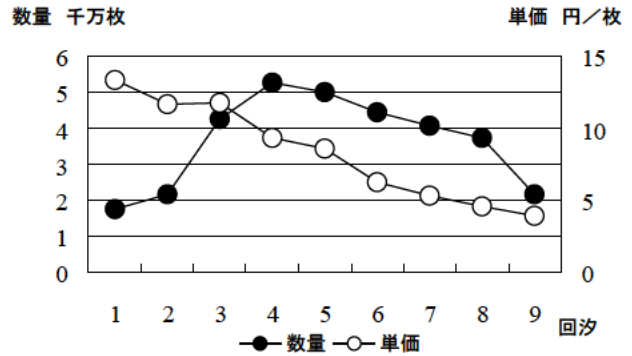


図4. 汐別生産枚数と単価の推移